

ドイツにおける「赤と緑」の実験 (1)

—— 連邦および州における連合形成実績からみた時期区分仮説 ——

小 野 一

Das “rot-grüne” Experiment auf der Bundes- bzw. Länderebene der Bundesrepublik
Deutschland (1)

—— Koalitionsbildungen und eine Hypothese über die
Entwicklungsphasen des Experiments ——

ONO Hajime

1. はじめに

私が、ドイツにおける「赤と緑」の実験、すなわち社会民主党（SPD）と緑の党との連立による改革政策というテーマを手がけてからすでに10年近くの時間が経過している。連邦における赤緑連合（シュレーダー政権）の成立をはじめこの間の状況変化や経験蓄積は、これまでの研究成果を総合し「実験」に関する一応の評価を下すべき時期に来ていることを示唆する。本稿では、連邦および州レベルにおける連合形成実績とSPD内政治過程の通史的叙述を通じ、赤緑連合の時期区分仮説を提示する。続編における第一次シュレーダー政権の政策評価とあわせ、これまでの研究の総まとめを行うための礎石としたい。

2. 通史的概観

2. 1. 赤緑連合の黎明期（第一ステージ）

「新しい社会運動」に起源を有する政治勢力は、70年代なかば頃から地方議会に現れ始めた。80年1月に全国政党として発展を遂げたのを機に「緑の党」と名乗り、83年以後はほぼ一貫して連邦議会に議席を得ている。緑の党のシステム定着は戦後のドイツ政治の一大転換点だが、特にSPDに与えた衝撃は大きい。ライバル党であり潜在的連合パートナーでもある新党の出現は、党内における政治的対抗関係にも影を落としたからである。

SPD内における政治的立場の多様化は、すでに社会自由連合政権時代から始まっていた。

同党の国民政党政化により、あるいはヴィリー・ブランドの改革政策に惹かれて入党してきた若い世代の新中間層は、伝統的支持者層とは違った政治的要求をもつ。生活の質などといった新しいテーマや活動スタイルは、組織された産業労働者や福祉国家のクライアントのそれとは異なる。また現状に対するラディカルな批判は、シュミット首相の現実主義路線としばしば摩擦を引き起こした。そのような対立の例としては、81年秋のブランド＝レーベントール論争や、エアハルト・エップラーの平和デモへの参加などが思い起こされよう。ペーター・グロツの言うごとく、「(SPDは)、その社会的構成においてさまざまな利害構造をもった支持者ブロックの集合体となったのであり、同時にこうした支持者ブロックに対して改革遂行のための動機づけを与えていかなければならない」⁽¹⁾のである。

こうした状況は、80年代以降の西欧社会民主主義陣営内外で広くみられた。ハーバーマスはこの時代の政治的対抗関係を、新保守主義、右派社会民主主義、成長批判者の体制批判の対立状況としてとらえるが⁽²⁾、片や新保守主義、片や脱物質主義といった相対立する方向性があり、SPD内にも併存した。このうち脱物質主義的価値を取り入れ、従来型福祉国家のエコロジー的改革を志向した者は、緑の党との協力関係の中に活路を見いだした。

82年のシュミット政権の崩壊は、党内改革派には有利に作用した。60年代後半から70年代初頭にかけて流入した世代が発言権を握り、政権党時代の政策に距離を置くようになった⁽³⁾。エコロジーやオルタナティブ思考がSPDのエリートのイデオロギー状況を特徴づけるようになり、そう言うてよければ、束の間の左翼ルネサンスを迎える。

こうしてSPDと緑の党が協力し合う条件が整いつつあったが、両党の連立政権はこの段階ではまだ地方自治体レベルに限られていた。

2. 2. ヘッセン第一次赤緑連合の成立とSPD（第二ステージ第一期）

85年12月12日、ヘッセン州緑の党のヨシカ・フィッシャーが環境・エネルギー大臣として入閣し、州レベルでは初の赤緑連合政権が成立した。

この連合政権には、緑の党の閣外協力に依存するSPD単独少数派内閣が先行している(83年9月～)。その際の閣外協力協定⁽⁴⁾では不一致点は不一致点として明記するなど、両党の接近は慎重になされた。その後SPD側から正式な連合形成の申し出がなされ、閣外協力協定は事実上の連合協定として機能するようになる。同州で赤緑連合が可能になった理由としては、地方自治体レベルでの協力関係により連合形成の下地ができていたこと、ホルガー・ベルナー首相が古い世代に属する人物だったにもかかわらず、先進的な政治的志向をもつSPD南ヘッセン地区組織が緑の党との連立を促進する圧力となったこと⁽⁵⁾、緑の党「現実派」の代表人物でありながら「原理派」にも受け入れ可能なフィッシャーのパーソナリティが有利に作用したこと、などが挙げられる。

86年に入ると、翌年の連邦議会選挙に向け選挙戦が本格化する。SPDは、緑の党との連立に徹底して敵対的な態度をとるヨハネス・ラオ候補の下、単独過半数獲得という目標を掲

げる。それが非現実的なことは、すでに選挙前のデータ⁽⁶⁾からも明らかだった。実現不可能な目標設定については、戦術的判断ミスないしは党執行部の混乱と評されることもあるが、連合問題をめぐる論争を未然に回避し、党の結束を保つ必要性を考慮するなら、党執行部の行動はむしろ合理的な選択という見方すら可能である⁽⁷⁾。

選挙目標についての楽観的見通しが選挙戦の中で増幅されたのは、事実である。その第一は、SPDが単独過半数を獲得した85年5月12日のノルトライン＝ヴェストファーレン州議会選挙における経験が、機械的に連邦レベルに持ち込まれたことである。ラオの側近として選挙を勝利に導いたボド・ホムバッハが連邦でも大きな役割を果たしたことを考えるなら、驚くには値しない。このグループは「デュッセルドルフ派」とよばれ、ペーター・グロッツを中心とする「ボン派」と対立した⁽⁸⁾。他に、過度に楽観的な世論調査結果⁽⁹⁾が党内で誇大な解釈を生んだり情報操作に使われたり、ということもあった。

だがそれだけではない。当時のSPD内には政治的方向性、とりわけ政党連合問題をめぐって意見を異にするグループが存在したのである。同党の支持者層が多様化する中で流入してきた若い世代の活動家層は、緑の党の掲げる価値観にも共鳴できるのに対し、伝統的支持基盤を代表する活動家には緑の党との連立など考えられないことだった。先述のグロッツなどは、こうした党内対立の調整に苦慮したようである。

SPDの選挙戦術は、「駅伝戦術」とよばれた。86年に行われる地方選挙ごとに得票を増し、連邦議会選挙では単独過半数を獲得する、というものである。この方法ではどこかひとつの「駅伝区間」でほころびが生じれば戦術全体が崩壊する。早くもニーダーザクセン州議会選挙(6月15日)でかげりが見えていたが、戦術破綻を決定的にしたのがハンブルク議会選挙(11月9日)での大敗北である。SPDの単独過半数などもはや誰も信じない。「デュッセルドルフ派」の重要人物ヴォルフガング・クレメントが執行部を辞任し、ラオは党内で孤立の度を深める。

87年1月25日の連邦議会選挙は、予想どおりSPDの敗北となる。6月の党大会では、かねてから予告されていたようにブランド党首が引退し、フォーゲルが後継に選出された。最も重要な変化は、「デュッセルドルフ派」がボンの舞台を去ったことにより、赤緑連合に対するタブーが解けたことである。緑の党との連立に抵抗感をもたないニュー・リーダーが連邦でも主導権を握り、SPDの連合政策上の方向性を大きく変えるかに思われた。

だがそれにもかかわらず、いやそうであるからこそ、党内右派の対抗結集が活発化したことも見逃せない⁽¹⁰⁾。「デュッセルドルフ派」には、伝統的牙城ノルトライン＝ヴェストファーレンでラオの声望が失われることを可能な限り少なくし、選挙後の路線論争においてヘッセンに対して優位に立つ、という目論見があったようである⁽¹¹⁾。ヘッセンが「赤と緑」のパイオニア・ランドだとすれば、ノルトライン＝ヴェストファーレンはそれに対する党内反対派の砦となった。

それだけに、87年2月にヘッセンの赤緑連合が、原子力関連施設をめぐる対応を躰きの石

として崩壊し、繰り上げ選挙で保守政権に取って代わられたことは、党内右派には反攻のチャンスのようにさえ思われた⁽¹²⁾。

2. 3. 束の間の左翼ルネサンス（第二ステージ第二期）

このように政党連合政策と政治的方向性をめぐる党内対決が鮮明になる中、80年代後半のSPDでは、ベルリン綱領に向けての党内論議が最高潮に達する⁽⁴⁵⁾。

「ブランドの孫たち」の登場は、新しい価値観、新しいテーマ、新しいスタイルを党内に持ち込み、SPD内の世代交代を印象づけた。その中でも注目されたのが、87年6月の党大会で副党首に就任したオスカー・ラフォンテーヌである。彼は、SPDの伝統的な支持基盤を超えた社会的グループを引きつけ、党内統合を可能にする人物だと思われた⁽¹³⁾。

ベルリン綱領へ向けての党内論議は、84年党大会が設立を決めた委員会を中心に行われたが、そこにはエコロジー派を代表するエップラーとともに、党内右派を含む多様な人物が集まった。ラフォンテーヌも執行議長として第二次草案をまとめるなどしたが(89年3月)、彼の関心はむしろ「進歩90」とよばれる理論サークルのほうにあった。彼の戦略は、①産業社会の近代化とエコロジー的革新、②賃金補償を伴わない労働時間短縮による労働社会の転換、③緑の党とともにFDP（自由民主党）との連合可能性も追求すること、④利益集団の調整と権力維持という旧い政治スタイルを刷新すること、であった⁽¹⁴⁾。

88年のSPD党大会は、いわゆるクォーター制の採用で注目される。それによれば、男女いずれかの性が40%を下回ってはならない。この原則は党役職者では94年までに、議員団では98年までに達成が求められる⁽¹⁵⁾。これは、新しい価値観・スタイルを多岐にわたって包摂しようとしたSPDの努力が、具体的な党内実践として結実したものといえる。

89年1月29日の選挙により、西ベルリンでは赤緑連合政権が成立した。ヘッセン第一次に続く2例目の赤緑連合の成立は、たしかにSPD内エコロジー派を活気づけるものではあった⁽¹⁶⁾。しかし両政党間のイデオロギー距離は大きく、当地のSPDがAL（オルタナティブ・リスト）との連立に乗り気でなかったふしのあることは⁽¹⁷⁾、同政権が短命に終わることを予感させるものだった。

ところで1989年は、言わずと知れた現代史の一大転換点である。いわゆる東欧革命の嵐の中、ベルリンの壁が崩壊した。そうした中、新綱領採択のためのSPD党大会は、同年12月、開催地を急遽ベルリンに移して行われた。ドイツが再統一に湧く中、SPDの路線転換は世論の注目も引かず、「さしたる討論も展開されずに終わってしまった」⁽¹⁸⁾。日本の進歩的知識人の間では評価が高く、実際数々の斬新な視点を打ち出したベルリン綱領だが、その後この綱領はドイツではほとんど言及されなくなった。

翌90年は、再統一後初の連邦議会選挙の年である（12月2日投票）。この選挙に際してSPDの首相候補となったのはラフォンテーヌだが、選挙後に赤緑連合が想定されていることは明らかだった⁽¹⁹⁾。それに先立つニーダーザクセン州（5月13日投票）における赤緑連合政

権の成立も、この方向性に弾みをつけるものだった。

ラフォンテーヌは当初、世論調査ではコール首相（CDU／CSU：キリスト教民主社会同盟）に対しリードしていた。同年4月のラフォンテーヌ暗殺未遂事件への同情もあり、SPDは有利な選挙戦を展開していた。だがドイツ再統一が前面に押し出され、環境問題や失業問題など多くのテーマが重要性を失う中で、まもなく壁にぶつかる。SPDは再統一に消極的、との印象をぬぐい去れなかったのである。突如持ち上がった国内問題よりも第三世界の飢餓問題の解決のほうが重要、というラフォンテーヌの価値観⁽²⁰⁾は、急速なドイツ統一を求める有権者の間では理解されず、選挙は保守の勝利に終わった。最も深刻なのが、旧西ドイツで得票5%を下回った緑の党である。これはSPDがエコロジー志向を強めた結果である、との解釈もあるかも知れない。だが緑の党の票がSPDに喰われ、SPDは保守に喰われた、という構図は一目瞭然である。明らかに右の風が吹いていた。

連邦議会選挙と同日、ベルリンでも議会選挙が行われた。これは、先述の赤緑連合政権の早期崩壊を受けての繰り上げ選挙である。その結果、SPDはPDS（旧東独共産党未裔政党）を含みぬ限りCDUに対抗して多数派形成ができない議席配置が出現し、唯一の現実的選択肢として大連合政権（CDU＋SPD）が成立した。この連合は当事者によってさえ例外的と位置づけられ、むしろそれぞれの党のアイデンティティの保持に重きが置かれている⁽²¹⁾。両党において大連合への抵抗感は小さくはなかったが、この政権は2度にわたり改選を経て継続し、CDUの不正により連合が崩壊する2001年6月まで存続した。

2. 4. SPDの路線転換と連合オプションの多様化（第二ステージ第三期）

90年連邦議会選挙敗北後のSPDの党内状況は混迷を極めたが、そこに明確な傾向として読みとれるのは同党の右傾化である。この要因をドイツ統一後の特殊事情にのみ帰するのは正しくない。80年代後半の「左翼ルネサンス」への揺り戻しと見るべきである。こうした党内状況を背景に、州レベルではあらゆる方向に開かれた連合パターンが見られた。

91年1月20日のヘッセン州議会選挙は、連邦議会選挙の雪辱戦のような意味をもった。同州では第一次赤緑連合の崩壊後、CDUとFDPの連立政権が統治していたが、選挙の結果再び赤緑連合政権が成立した。この方向性に期待を寄せる者には朗報だが、これをもってSPD内エコロジー派の再興と即断はできない。首相候補ハンス・アイヒェルは赤緑連合路線以外の支持者も意識したキャンペーンを行い、赤緑連合じたいも、プラグマティズム志向の強まりの中で数年前とはその性格を変えているからである。

91年の党大会は「SPD 2000」という委員会を発足させ、80年代の停滞を克服すべく党組織改革に着手する。それは、直接民主制的要素の導入による党員の参加機会の拡大と、党組織の開放化を柱とするもので、具体的には、選挙候補者の予備選挙、党員投票、非党員の参加する党プロジェクトや候補者リストなどがある⁽²²⁾。ただしこうした改革は、90年代なかばまでに停滞したとされる⁽²³⁾。

この時期、州レベルにおける政権連合パターンを見ると、SPDの連合政策には全く一貫性が見られない。91年4月21日に選挙が行われたラインラント＝ファルツでは、SPDとFDPの連合政権が成立した。SPDは今回、緑の党またはFDPのいずれかと連立することで多数派形成できるという幸運に恵まれたが、後者を選んだ。ブレーメンでは91年9月29日の選挙の結果、SPDは単独過半数を維持できなくなり、SPD、FDP、緑の党からなる三党連合（信号機連合）が成立した。バーデン＝ヴュルテムベルク（92年4月5日投票）では大連合が成立し、ベルリンの事例とあわせ、大連合はSPDの不可欠の連合オプションとして定着する兆しを見せた。ハンブルク（91年6月2日投票）およびシュレスヴィヒ＝ホルシュタイン（92年4月5日投票）では、SPDは単独過半数を守った。この時点での赤緑連合政権は、ニーダーザクセンおよびヘッセンの2例である。ユンが言うごとく、SPDは連邦州において、政党システムの構造次第でCDUともFDPとも緑の党とも連合を組む、古典的な連合政党としての機能を引き受けたのである⁽²⁴⁾。その後ハンブルクでは、93年9月19日の選挙の結果、SPDと新党シュタット・パルタイの連立政権が成立した。当地のエコロジー勢力GALは次第に原理主義的反対派路線から脱却しつつあったが、赤緑連合の実現までには今しばらくの時間を要したのである。

90年代前半におけるSPDの右傾化を語るときに最も重要なのは、庇護権問題での路線転換である。ナチスの戦争犯罪への反省もあり、政治的に迫害された者が保護を求める権利を憲法上保障してきた西ドイツだが、流入する外国人の増加に伴い、庇護権の制限を求める声が保守派を中心に強まった。SPDはもともとこれには批判的だったが、92年8月の「ペータースブルク綱領」や11月の臨時党大会を経て従来の立場を放棄する⁽²⁵⁾。こうして93年5月の連邦議会で修正案が可決され、庇護権の適用は実際には著しく困難になった。SPDの中であくまでも修正反対を貫いた者はむしろ少数派で、財源と住居不足の中で庇護権申請者の受け入れに限界を感じていた地方政治家の間では、従来の立場を変えないと有権者の支持を失うのではとの懸念もあったのである⁽²⁶⁾。

93年6月13日、不正疑惑により退陣したエングホルムの後継者の選出に際してSPDは初の党員投票を実施し、ルドルフ・シャーピングが有効票の40.3%を得て新党首に選出された。皮肉なことに、彼は直接民主制には懐疑的である。緑の党との連立にも批判的で、両党関係は彼の下で冷え切ったものとなった⁽²⁷⁾。90年代前半のSPDの右傾化について語るとき、彼の名は欠かせない⁽²⁸⁾。彼は94年連邦議会選挙の首相候補となった。

各種の選挙が連続する94年は「スーパー選挙年」とよばれた。ニーダーザクセン州議会選挙（3月13日）では、赤緑連合政権の任期満了を受け、その継続が焦点となった。だがゲアハルト・シュレーダー率いるSPDが過半数の議席を制したため、赤緑連合は解消されてSPD単独政権が成立した。国民の直接選挙ではないが、共和国大統領を選出するための連邦会議（5月23日）において、FDPは決選投票でCDU／CSU推薦の候補を支持した。大統領選挙は建前上、党派政治とは無関係だが、この出来事は、FDPがSPDに距離を置い

ていることを印象づけた。ザクセン＝アンハルト州（6月24日投票）の赤緑連合政権は、P D Sの閣外協力に依存する少数派内閣である⁽⁴⁶⁾。東西の政治構造がまだなお大きく異なっているとはいえ、反共風土の強いドイツのこと、秋の連邦議会選挙を見越して話題を呼んだ。

94年10月16日の連邦議会選挙は、首相候補シャーピング、ラフォンテヌ、シュレーダーから成る「トロイカ」体制の下で戦われたが、コール保守政権が僅差で逃げ切り政権交代は実現しなかった。S P Dの選挙キャンペーンは、伝統的支持者層を意識しつつも政策的プロフィールは不鮮明で、人物を前面に押し出したキャンペーンが展開された。もちろん、選挙後の連合パートナーについては言明されなかった。

2. 5. 混迷するS P Dの党内状況（第二ステージ第四期）

「トロイカ」は、選挙敗北後ほどなく崩壊する。95年8月のシャーピングとシュレーダーの党内抗争は、ジャーナリズムでは「夏の劇場」とよばれ、グロテスクなイメージを与えた。そして同年11月のマンハイム党大会では、突如立候補したラフォンテヌが現職シャーピングを破り新党首になるという、異例の事態が起こった⁽²⁹⁾。以後党内の主導権争いは、ラフォンテヌ対シュレーダーの対決へと収斂していく。

再び州レベルの連合状況に目を向けてみよう。ヘッセンでは、連邦議会選挙後最初の州議会選挙（95年2月19日投票）を経て、第三次赤緑連合政権が成立した。任期を全うした赤緑連合が選挙を通じて継続を確認されるのは、これが初めてである。

同年5月14日のふたつの州議会選挙は、連合問題をめぐるS P Dのジレンマが前面に押し出されたような結末となった。同党はノルトライン＝ヴェストファーレンとブレーメンで正反対の路線を選択したのである。前者では、S P Dの強固な支持基盤をなす組織された工業労働者がしばしば保守的な政治的傾向を示すこと、ラオ首相が緑の党との連立に乗り気でないことなどから、交渉は難航したが、結局のところ赤緑連合が成立した。一方、赤緑連合が大連合かの決断に迫られた点では同じだが、ブレーメンのS P Dはその決定に際して党員投票を行い、その結果C D Uとの連合路線が選択された。ブレーメンのS P D単独政権は、信号機連合という移行期を経て大連合に取って代わられたわけである。

10月22日の選挙を経てベルリンでは、大連合政権が継続された。S P Dの側には難色を示す者もいたが、他に現実的選択肢はなかったのである。

96年3月24日の3つの州議会選挙ではF D Pの消長が注目されたが、いずれの州でも議会入りに成功した。ラインラント＝ファルツではS P DとF D Pの連立政権が継続した。保守的な政治風土もあり、同州で赤緑連合を追求するのは有利でなかった。選挙後クルト・ベック首相（S P D）は、「赤と黄色」の連立政権は連邦レベルでもモデルたり得る、と発言する⁽³⁰⁾。S P Dの単独過半数が維持できなくなったシュレスヴィヒ＝ホルシュタインでは、赤緑連合政権が成立した。バルト海沿岸高速道路などの争点にもかかわらず、プラグマティズム色の強いこの政権は、次世代型赤緑連合の到来を予感させる。バーデン＝ヴュルテムベルク

では、それまでの大連合に代わってC D UとF D Pの連立政権が成立した。

2. 6. 98年連邦議会選挙に向けて（第二ステージ第五期）

98年の連邦議会選挙を見越してS P Dは首相候補を一本化できず、水面下で激しい駆け引き合戦が展開された。とはいえ、形勢は次第にシュレーダーに有利に傾いていく。97年4月の世論調査では有権者の62%がシュレーダーのほうが首相候補にふさわしいとし、ラフォンテーヌと答えた者は27%にすぎなかった⁽³¹⁾。S P Dのエリートでも、右派を中心に執行部や議員団の3分の1がシュレーダー支持で、3分の1がラフォンテーヌ支持と見積もられた⁽³²⁾。

両者の対立は、単なる候補者指名をめぐる争いではない。政治的方向性をめぐる党内対抗関係⁽³³⁾の反映とみるべきである。折しも97年のヨーロッパでは英仏の社会民主主義勢力の政権獲得が注目を集めたが、両者の方向性は対照的だった。フランス社会党のジョスパンがケインズ主義に基づく伝統的な社会民主主義的経済政策を追求するのに対し、英国労働党のブレアは新自由主義的方向に傾斜する。ブレアの標榜する「近代化」路線への賛否が、当時の欧州社会民主主義者を峻別するメルクマールとなった。シュレーダーは、ブレアと並んで新自由主義的価値観をおおいに取り入れた欧州社会民主主義者である。それに懐疑的なラフォンテーヌは、かつては守旧的な労働組合への批判者として知られたが、少なくともこの時点では社会民主主義の伝統的立場の擁護者として立ち現れた⁽³⁴⁾。こうした対抗関係に、連合問題や環境政策などが絡まってくる。「ラフォンテーヌは、エコロジックの税制改革を支持して、緑の党との連立に好意を寄せる者から喝采を浴びた。それに対しシュレーダーは、それはS P Dの潜在的支持者層を貧困化させる道と考えたがゆえに拒否の態度をとり、大連合路線の支持者から歓迎された。」⁽³⁵⁾

97年9月21日のハンブルク議会選挙後、同市では初の赤緑連合政権が成立した。これにより、16の連邦州のうち6州が赤緑連合統治州となった⁽³⁶⁾。同時に、赤緑連合そのものが深刻化する社会問題と厳しい財政事情を前にプラグマティックな問題解決志向を強めていることも、注目に値する。原理主義的反対の強かったハンブルクのG A Lもこの頃までに現実主義路線に転じていた。

S P Dの首相候補指名は正式には98年4月17日の党大会でなされたが、その行方を決定的にしたのは3月1日のニーダーザクセン州議会選挙である。選挙前にシュレーダーは、S P Dの得票率が前回比2%以上下回ったら連邦首相候補の座をあきらめる、と声明していた。困難な目標だが、ふたを開けてみれば3.6%増の大勝利。彼の威信はおおいに高まり、党執行部はただちに、彼を首相候補とする意向を発表した。

その後S P Dは連邦議会選挙に向け、周到なキャンペーンを展開する。スローガンは「イノベーションと公正」。シュレーダーが前者を、ラフォンテーヌが後者を体現し⁽³⁷⁾、政治的方向性や利害を異にする多様な支持者層をひとつにまとめ上げることに成功した。

他党の動向に目を転じてみよう。緑の党は、同年3月のマグデブルク党大会で高率の環境

税を盛り込んだ決議⁽³⁸⁾を採択し、有権者の支持を一気に失う。これはエネルギー多消費型社会で徹底したエコロジー改革を行おうとする場合のジレンマであり、単に緑の党の戦術ミスと片づけるべきでない。守勢を強いられた同党執行部は、以後の選挙戦ではこの決議への言及を避けた。同党の現実主義化には、これでますます拍車がかかったといえる。

CDU/CSUは、ドイツ再統一という歴史的偉業を成し遂げたコール首相を前面に押し出したキャンペーンを行う。しかし16年もの長期政権への「飽き」は否定しようがなく、「コールは去らねばならない」という雰囲気が支配的だった。94年選挙で見られた選挙戦終盤でのコール陣営の追い上げも、今回は勢いを欠いていた。

こうして迎えた98年9月27日の連邦議会選挙ではSPDが第一党となり、緑の党との連立による政権交代が可能となった。3週間の交渉の末に連合協定が作成され、10月27日の連邦議会でシュレーダーが連邦首相に選出された。

とはいえSPD内には、緑の党以外の連合パートナーを望む者も少なくなかった。戦略的意図から赤緑連合への意向を表明していたシュレーダーも⁽³⁹⁾、緑の党に全幅的な信頼を寄せているわけではない。彼は選挙前から、経済相ポストにヨスト・シュトルマン氏の起用を表明していたが、それは経済界寄りで新自由主義への傾斜を見せる彼の政治的立場からの帰結であった。もっとも同氏は選挙後この誘いを固辞するが、それには、左派の領袖ラフォンテーヌに対する不信感があったためといわれる⁽⁴⁰⁾。

そのラフォンテーヌも、翌年3月11日、すべての役職からの辞意を表明し、政治活動から身を引いた。その理由には様々な憶測がなされるが、彼の左派的立場が限界に達した末の行動とみるべきだろう。ここにSPDの党内抗争は終わりを告げ、以後シュレーダー政権では、新自由主義と競争的国家のイデオロギー的優位は強化された⁽⁴¹⁾。

2. 7. 赤緑連合新時代へ (第三ステージ)

シュレーダー政権の成立により、赤緑連合は連邦レベルでも政権オプションとしての地位を確立した。それはドイツの政党政治史上の画期であるが、同時にそこでの経験は、改革連合としての赤緑連合の限界を明らかにするプロセスでもあった。

99年2月7日のヘッセン州議会選挙の結果、2期にわたる赤緑連合政権は、CDUとFDPの連立政権に取って代わられた。予想外の政権交代は、連邦政府の外国人政策に対する保守の反対キャンペーンによるところが大きいとされる。赤と緑のパイオニア・ランドでの敗退のショックは大きかった。赤緑連合の失地回復は、2003年2月2日の選挙でも達成されなかった。

5月23日、ノルトライン＝ヴェストファーレン州首相ラオ(SPD)が連邦共和国大統領に選出されたことは、赤緑連合がドイツの立法機関において安定的な勢力となったことの証しである。しかし99年度中に行われたその後の州議会選挙は、全般的にSPDおよび緑の党にとって厳しいものだった。ほとんど唯一の例外としてSPDの大幅増となったブレーメン

(6月6日投票)では、大連合政権が継続された。議席配置の上では赤緑連合も可能であったが、それは実現しなかった。この図式は2003年5月25日の選挙でも繰り返される。ザールラント(9月5日投票)では85年以来のSPD単独政権が野に下り、CDU単独政権が成立した。ベルリン(10月10日投票)では大連合政権の継続が確認された。その他、この年選挙が行われた旧東独3州(ブランデンブルク、チューリンゲン、ザクセン)でも、SPDは大幅に得票を減らしている。

既存の赤緑連合政権が選挙により継続した例は、ノルトライン＝ヴェストファーレン(2000年5月14日投票)およびシュレスヴィヒ＝ホルシュタイン(2000年2月27日投票)にみられる。両者とも、プラグマティズム志向をますます強める。特にノルトライン＝ヴェストファーレンの赤緑連合は、両党の政治的立場の違いゆえにたびたび連合危機を繰り返しただけに、任期を全うして選挙による継続を勝ち得たことの意義は大きい。また同州首相のクレメントは、SPD内でも新自由主義的傾向の強い人物であり、改革連合としての赤緑連合のイメージは過日のものであることを示唆する。ラインラント＝ファルツ(2001年3月25日投票)ではSPDとFDPの連立政権が継続を確認された。

2001年9月23日の選挙の結果、ハンプルクの赤緑連合政権が崩壊した。これは、同年9月11日の同時多発テロ直後の異常な世論状況の下、突如現れた右翼ポピュリストが高い支持を得たことにもその一因が求められる。10月21日、ベルリンで、大連合政権の崩壊を受けての繰り上げ選挙が行われた。その結果は、信号機連合(SPDP+FDP+緑の党)による多数派形成も可能なものだったが、結局SPDとPDSの連立政権が成立した。

ところでシュレーダー政権ほど、激動の世界情勢に翻弄された政権も珍しい。99年にはコソボ紛争の解決のため、戦後初めて連邦国防軍が欧州域外に派遣された。とりわけ平和主義をルーツとする緑の党支持者には承服できないことで、赤緑連合は早くも試練に直面した。それ以上に深刻なのは、「9月11日」テロ後のアフガン派兵である。派兵決議を赤緑連合の自前の票で成立させるために、シュレーダーは、派兵案に自らの信任案を結びつけるという前代未聞の方策をとった。政権分裂の危機は何とか回避されたが、その代償はあまりにも大きく、赤緑連合は実質的に終わったというのが大方の見方となった⁽⁴²⁾。

2002年9月27日の連邦議会選挙では、当初、与党連合の劣勢が伝えられた。SPDは、シュレーダーが最重要課題と位置づけた雇用対策で芳しい成果を上げられず、緑の党は、逆風の中で構造的弱体化に歯止めをかけられなかったのである。だが与党は終盤の追い上げに成功し、赤緑連合は継続が確認された。それには、シュレーダーが対イラク戦争への参加を明確に否定していたこと、同年夏の東部ドイツの洪水に際して政府の対応が評価されたこと⁽⁴³⁾、選挙キャンペーンにおいて戦術的成功をおさめたこと、などが指摘できよう。

この選挙の投票行動分析や第一次シュレーダー政権の政策評価については、今後の研究成果が出揃うのを待つべきだろう。現時点で言えることは、連邦レベルでの政権を1期経験することで、赤緑連合もドイツ政治の政党連合オプションとして定着した、ということである。

その際、プラグマティズムとルーティンワークを特徴とする普通の連合政権への変貌という、メンゲがヘッセン州赤緑連合の観察を通じて得た結論⁽⁴⁴⁾が、連邦レベルでも確認されるのである。

3. 「赤と緑」の実験に関する時期区分仮説

新社会運動起源の政治勢力が、先進国社会の政治に大きなインパクトを与えつつ、政党システムに定着し、権力の中枢に到達した今、「赤と緑」の実験に関して総括的評価を下すべき時期に来ている。本稿の通史的叙述はそのための予備作業にすぎないが、ここで「実験」の時期区分仮説を示しておくのが有益であろう。

私の時期区分仮説では、赤緑連合が政治に影響を及ぼしうる「資源」の大小ないしは権力中枢への到達度に注目して、3つのステージを区別する。その上で、その時々における赤緑連合内外の政治情勢を考慮していくつかのサブ・ステージに区分する。

まず前者について。第一ステージは、ヘッセン州で全国初の赤緑連合政権が誕生する85年12月まで、いわば赤緑連合の黎明期である。第二ステージは、赤緑連合が州レベルにおける政権オプションとして定着していく過程であり、98年の連邦議会選挙まで継続する。第三ステージでは、ドイツ政治の権力中枢に到達した赤緑連合が、連邦レベルでの政治過程でいかなる政策を実現してきたかが焦点となる。

70年代以降、新社会運動起源の政治勢力は、地方自治体や州議会に進出し始める。第一ステージにおけるSPDと緑の党による政権は自治体レベルにとどまるが、そこで培われた協力関係がその後の赤緑連合の基礎になった。この時期をサブ・ステージに区別するなら、80年における緑の党の全国政党化と連邦議会選挙への参加が分水嶺となろう。これを境にSPDは、緑の党の存在を前提に戦略を展開し、党内の異なった立場を統合するという困難な課題に直面したからである。

第二ステージでは、赤緑連合が州レベルで実績を積み上げていく。ただし他の連合オプションも定着する中で、赤緑連合が必ずしも最優先的に選ばれる解とは限らないことも明らかになった。また、ドイツ政治の激動期でもあるこの時期、SPDでは時計の振り子のような政治的立場の変化が見られ、緑の党でも現実主義化がいっそう進んだ。

サブ・ステージに区分するなら、第一期は、原子力問題を蹟きの石にヘッセン第一次赤緑連合が崩壊する、87年初めまでである。SPD内政治的対抗関係が87年連邦議会選挙戦を通じて明らかになったのも、この時期である。

第二期では、ベルリン綱領へ向けてSPD内ではエコロジー・オルタナティブ思考が最高潮に達する。「東の間の左翼ルネサンス」は「赤と緑」の実験の思想史的次元での評価の根幹に関わる。だがドイツが再統一に湧く中、90年連邦議会選挙に敗北すると、SPDの80年代後半を特徴づけたエコロジー路線も挫折し、第二期は幕を閉じる。

それに続く第三期は、庇護権問題への対応にも見られるように、SPDの右傾化をもって特徴づけられる時期である。シャーピングは、こうした方向性を象徴するような人物だが、彼の下で緑の党との関係も冷え込んでいった。

94年連邦議会選挙敗北後を赤緑連合第二ステージの第四期としよう。「トロイカ」の崩壊、「夏の劇場」、マンハイム党大会と、この時期のSPD内権力闘争は熾烈を極めたが、それは政治的方向性をめぐる争いとも結びついていて、連合政策面でも、この時期のSPDはしばしば、赤緑連合か大連合かの決断を迫られた。

第五期は、シュレーダーの党内ヘゲモニーの確立をもって特徴づけられる。この時期の始まりをいつとするかは難しいが、私としては、97年5月1日の英国総選挙に注目したい。新自由主義に強く傾斜したブレア労働党政権の誕生は欧州社会民主主義の一大転換点であるとともに、SPDにおけるシュレーダーとラフォンテーヌの主導権争いも実際にはこの時点で勝敗が見えていたからである。シュレーダーが名実ともに首相候補となると、SPDは結束して、98年連邦議会選挙に向けてキャンペーンを展開する。

シュレーダー政権の成立により、「実験」は第三ステージに突入する。権力の中枢に到達した赤緑連合は、改革政策で一定の実績を上げるが、同時にその限界も明らかになってくる。赤緑連合が政権を担当する中で、ラディカルな改革が後景に退きプラグマティズムが前面に出てくるといふ、州レベルでの経験から導き出された知見が、ここでも確認される。

第三ステージをサブ・ステージに区分するなら、シュレーダー政権の初期の改革の試みが第一期にあたる。例えば脱原発「百日プログラム」に見られるように、理想主義的な改革政策が現実政治の中で妥協を強いられることも、少なくなかった。左派の領袖ラフォンテーヌの失脚も、この時期を象徴する出来事である。

第二期にはシュレーダー政権は、日常の政局運営をこなしながらも、赤緑連合らしいアクセントを打ち出そうとした。この時期、赤緑連合への支持は芳しくはなかったが、エネルギー政策や外国人政策などで重要な改革が実現した。

「9月11日」のテロ事件以後が、シュレーダー政権の第三期である。内政面では治安対策が前面に押し出され、外交面では西側軍事同盟の一員としての関与を求められた。特にアフガン派兵をめぐる対応は、赤緑連合の最大の危機となった。

2002年の連邦議会選挙の結果、存続が危ぶまれた赤緑連合は、継続して政権を担当することとなった。この事実は重く、赤緑連合の新たな発展段階となると予想されるが、現在進行中の事象の分析は別の機会に譲りたい。

本稿続編では、第一次シュレーダー政権において実際になされた改革政策について分析し、政策評価を試みる。

註

- (1) Peter Glotz : Partei oder Kreuzzug? in: *Der SPIEGEL*, 1981/50, S.106.
- (2) ユルゲン・ハーバーマス著／河上倫逸監訳『新たなる不透明性』(松籟社, 1995) 209 - 215 頁。
- (3) Peter Lösche/Franz Walter : *Die SPD: Klassenpartei - Volkspartei - Quotenpartei*. Darmstadt, 1992, S.123. (邦訳書 168 頁)
- (4) Vereinbarung zwischen SPD und GRÜNEN für die 11. Legislaturperiode. Wiesbaden, 1984.
- (5) 小野一「ヘッセン州における『赤と緑』の実験」(『工学院大学共通課程研究論叢』39 - 2, 2002)。
- (6) SPD-Vorstand : Planungsdaten für die Mehrheitsfähigkeit der SPD: Ein Forschungsprojekt des Vorstandes der SPD - Zusammenfassender Bericht. Bonn, 1984. 「ミリュウ」概念に基づく知見が援用されたこの調査データの示すところによれば, SPDの潜在的支持者は41%である(CDU/CSU 46%, FDP 6%, 緑の党7%) (S.12)。SPDとしては, 緑の党の側にウイングを伸ばす戦術では過半数には到達し得ない。SPDの多数派形成の唯一のチャンスは, CDU/CSUの周辺的支持者を獲得することの中にある (S. 20)。
- (7) 小野一「1987年連邦議会選挙戦におけるドイツ社会民主党」(『工学院大学共通課程研究論叢』36 - 1, 1998)。
- (8) Thomas Krebs: *Parteiorganisation und Wahlkampf-führung: Eine mikropolitische Analyse der SPD-Bundestagswahlkämpfe 1965 und 1986/87*. Wiesbaden, 1996, S.114.
- (9) 世論調査機関 FORSA の調査によれば, 86 年はじめの時点で SPDの潜在的 supporters は 47% と見積もられた。
- (10) 党内右派の動向については, 小野一「ゼーハイマー・クライスと90年代のドイツ社会民主党／党内右派グループの素描」(『大原社会問題研究所雑誌』505号, 2000)。
- (11) *Der SPIEGEL*, 17. 11. 1986, S. 24.
- (12) Prost Wahlzeit: Die CDU vor dem Durchmarsch, in: *stern*, 1987/16.
- (13) Krebs, a. a. O., S.153. ; Lösche/Walter, a. a. O., S. 101. 「ラフォンテーヌは, 左翼・右翼という従来の対立線を物質的価値／脱物質的価値(産業社会の伝統派／産業社会の近代派)という対立線に転換させた点で革新的な戦略家ではあるが, それも左翼・右翼という陣営の存続を利用しているという点では有能な戦術家でもある。」(住沢博紀「新しい社会民主主義と改革政治の復権」(所収: 住沢／坪郷／長尾／阪野／長岡／伊藤編『EU経済統合とヨーロッパ政治の変容／21世紀に向けたエコロジー戦略の可能性』, 河合文化教育研究所, 1992), 218, 219 頁)。
- (14) 住沢前掲論文, 216 頁。
- (15) Lösche/Walter, a. a. O., S.256. クォーター原則をめぐる党大会論議は, *Protokoll vom Parteitag der SPD in Münster*, 30. 8.-2. 9. 1988. S. 90-128.
- (16) 「このように88年以後は, SPDと緑の党の連合はもはや当然の事となり, むしろエコロジー路線に立ってもそれ以外の連合の選択もありうるからこそ, 新しい展開といえる。」(住沢前掲論文, 221 頁)。
- (17) Horst W. Schmollinger : Die Wahl zum Abgeordnetenhaus von Berlin am 29. Januar 1989: Ein überraschender Wandel im Parteiensystem. in: *Zeitschrift für Parlamentsfragen (ZParl)*, 1989/3, S. 311.
- (18) 山本佐門『ドイツ社会民主党日常活動史』(北海道大学図書刊行会, 1995), 221 頁。
- (19) Wolfgang G. Gibowski/Max Kaase : Auf dem Weg zum politischen Alltag: Eine Analyse der ersten gesamtdeutschen Bundestagswahl vom 2. Dezember 1990. in: *Aus Politik und Zeitgeschichte (APZG)*, B11-12/1991, S. 14.
- (20) Eckhard Fuhr : Die SPD: Last der Vergangenheit und neuer Realismus. in: *APZG*, B5/1992, S. 12.
- (21) Uwe Jun : *Koalitionsbildung in den deutschen Bundesländern: Theoretische Betrachtungen, Dokumentation und Analyse der Koalitionsbildung auf Länderebene seit 1949*. Opladen, 1994, S. 226ff. 例えば連合協定

には次のような一節がある。「異なった価値観と目標をもった民主主義的諸政党は、状況と共通の責任とがそれを必要とする場合には、妥協に赴くことが可能である。……」(Koalitionsvereinbarung zwischen der Christlich Demokratischen Union Deutschlands (CDU) Landesverband Berlin und der Sozialdemokratischen Partei Deutschland (SPD) Landesverband Berlin. 23. 1. 1991, S. 5.)

- (22) Thomas Meyer/Klaus-Jürgen Scherer/Christoph Zöpel : *Parteien in der Defensive? Plädoyer für die Öffnung der Volkspartei*. Köln, 1994, S.147-149.
- (23) Siegfried Heimann : Die SPD in den neunziger Jahren. in: Werner Süß (Hrsg.), *Deutschland in den neunziger Jahren: Politik und Gesellschaft zwischen Wiedervereinigung und Globalisierung*. Opladen, 2002, S.98. 党改革に対する評価はさまざまだが、さしあたり Uwe Jun : Innerparteiliche Reformen im Vergleich: Der Versuch einer Modernisierung von SPD und Labour Party. in: Borchert/Golsch/Jun/Lösche (Hrsg.), *Das sozialdemokratische Modell: Organisationsstrukturen und Politikinhalt im Wandel*. Opladen, 1996, S. 219ff., S. 232.; Thomas Leif : Hoffnung auf Reformen? Reformstau und Partizipationsblockaden in den Parteien. in: *APZG*, B43/1993, S.28-29.などを参照。
- (24) Jun, 1994, a. a. O., S.161.
- (25) 大野英二『ドイツ問題と民族問題』(未来社, 1994), 143 - 151 頁。
- (26) Franz Walter : Die SPD nach der deutschen Vereinigung - Partei in der Krise oder bereit zur Regierungsübernahme? in: *ZParl*, 1995/1, S. 87.
- (27) Eckhard Fuhr : Zurück zur Mitte: Die SPD zu Beginn des Superwahljahres 1994. in: *APZG*, B1/1994, S. 11.
- (28) ある論者は、彼の登場は「ブランドの孫」路線の挫折と路線転換を象徴するものだという (Thomas Leif/ Joachim Raschke : *Rudolf Scharping, die SPD und die Macht: Eine Partei wird besichtigt*. Hamburg, 1994, S.9.)。
- (29) 党大会直後の時事的評論の中でレッシェは、専従活動家政党の終焉と政治のボナパルティズム化を指摘する。Peter Lösche : Die SPD nach Mannheim: Strukturprobleme und aktuelle Entwicklungen. in: *APZG*, B6/1996, S.26.
- (30) *Die Welt*, 6./7. 4. 1996 など参照。
- (31) *Der SPIEGEL*, 7. 4. 1997, S.23. その後の調査でもシュレーダー人気は衰えを見せていない (*Der SPIEGEL*, 30. 6. 1997, S.40. ; *Die ZEIT*, 8. 7. 1997)。
- (32) *Der SPIEGEL*, 2. 6. 1997, S.24.
- (33) 西田は、現状志向伝統維持路線 (CT), 左翼リバタリアン志向モダナイズ路線 (LM), 市場志向モダナイズ路線 (MM) を頂点とするトライアングル状モデルを提示し、各イデオロギーグループの対抗関係により SPD の党内状況を分析する。西田慎「シュレーダー社会民主党のジレンマ」(『ドイツ研究』31, 2000)。
- (34) *Der SPIEGEL*, 5. 5. 1997, S. 24, 29ff. 前出の西田モデルの用語を借りれば、ラフォンテースはCTとLMの擁護者と目された。このように相反する政治的傾向がひとりの人物に体现されるのは不自然なことであり、選挙後の破綻をすでに暗示していたといえる。
- (35) Heimann, a. a. O., S.91.
- (36) この頃ドイツのジャーナリズムでは、98年連邦議会選挙も見越して、州レベルでの赤緑連合政権に関する特集がしばしば現れた。*Die Woche*, 1997/44(24, Okt.) ; *Die ZEIT*, 1997/46(7.Nov.)などを参照。
- (37) Ursula Feist/Hans-Jürgen Hoffmann : Die Bundestagswahlanalyse 1998: Wahl des Wechsels. in: *ZParl*, 1999/2, S.223.
- (38) それによればガソリン価格は10年後には約3倍になる。Joachim Raschke : *Die Zukunft der Grünen*. Frankfurt, 2001, S. 217.
- (39) 1998年7月17日付 *stern* 誌のインタビューの中で彼は、赤緑連合を望んでいることを表明する (S. 23)。その一方で彼は、外国人犯罪者に対する厳しい措置 (強制送還) を要求する。ここには、保守的傾向をもった有権者の支持をもつなぎ止めようとする戦略的意図が見え隠れする。(小野一「総選挙一年前のドイツ社会民主党 / ラフォンテースとシュレーダーの対決」, 『労働運動研究』335号, 1997)。

- (40) Feist/Hoffmann, a.a.O., S.247.
- (41) Bodo Zeuner : Das System Schröder/Fischer oder die unvollständige Abschaffung der Politik. in: *Blätter für deutsche und internationale Politik*, 2000/10, S.1186-1187.
- (42) *Der SPIEGEL*, 2001/46 (12. Nov.) ; *Die ZEIT*, 2001/48 (22. Nov.) の特集など参照。
- (43) 通説にさえなっているこうした見解を紹介しつつも、Hilmerは、投票日直前まで態度を決めかねていた有権者の割合が高かったこと、野党の問題解決能力への評価も高くなかったことなどを挙げ、「今回ほど選挙戦が選挙結果を大きく左右したことも珍しい」との分析結果を提示する。Richard Hilmer : Bundestagswahl 2002: eine zweite Chance für Rot-Grün. in: *ZParl* 2003/1, S.192ff.
- (44) Richard Meng : *Links der Mitte: Welche Chancen hat Rot-Grün?*, Marburg, 1993, S.66.
- (45) 「同党は再び、プログラム政党を強く志向した。野党の地位にあつて実質的な政治的影響力をほとんど有しない時、しばしばそうであったように。」(Franz Walter: *Die SPD: Vom Proletariat zur Neuen Mitte*. Berlin, 2002, S.216.) ドイツ人研究者のSPD綱領に対する評価は、概してクールである。この後にも、ベルリン綱領は党内でも急速に忘れ去られた、との評価が続く。
- (46) 98年4月選挙以降はSPD単独少数派内閣として存続。緑の党が敗退し、CDUとの連立交渉も不調に終わったからである。SPDが大幅に得票を減らした2002年選挙以降は、CDUとFDPの連立政権に取って代わられた。

(おの はじめ 本学助教授)